

研究・調査発表

148

『多文化社会ブラジルにおける日系コミュニティの実態調査』中間報告ー日系団体の活動状況フィールド調査からその意義と役割を探るー
細川多美子(サンパウロ人文科学研究所)

『多文化社会ブラジルにおける日系コミュニティの実態調査』 中間報告

ー日系団体の活動状況フィールド調査からその意義と役割を探るー

細川多美子

サンパウロ人文科学研究所

〔キーワード〕 日系団体、日系社会、地域コミュニティ、文化施設（会館）、日本人性

〔要 旨〕

ブラジルにおける「日系人」およびそのコミュニティ「日系社会」は、過去の実態調査から30年近くたった今、過去の類推を超えた多様な変化を遂げている。今日の先進的多文化社会ブラジルを俯瞰したとき、日系人はマイノリティでありながら、ブラジルの発展への寄与、日本文化の普及という両面において、存在感を強く持つ。ブラジルを構成する重要な要素として確実な歩みを残し、近年は日本文化関連イベントや日本料理などが移民始まって以来の人気を博し、規模は年々拡大しており、日系人の評価はかつてないほど好ましい状況にある。しかし「日系社会」という存在自身はあいまいなイメージでしか語られておらず、これまでの移民研究でも「日系社会は消えていく」という推論が一般的であり、50年近くも同じことが繰り返され続けた。「消えていく」一方で存在感を増しているという状況は、理論上矛盾しているといえるだろう。それは、「日系社会」がかつて想像されたものとは違ったかたちで形成されているからだと思われる。その日系社会の核を、ブラジル各地で日本人移民が築いてきた「日本人会」、そこからの発展形として運営されている「文化協会」、「文化体育協会」であるとして、その活動内容や規模、役割、地域社会への影響などを実地調査し、その実態を把握するのが標題の調査である。当レポートは、サンパウロ人文科学研究所が2016年に開始、2018年6月終了の予定で実施している調査の中間報告である。

1. 調査の目的と役割

1.1 日系団体をリスト化、マップ化で可視化する。

「文化協会」、「文化体育協会」等の名称で活動が続ける日系団体（居住地域を基盤にし、非営利で日本文化の継承、普及を主な目的とする日本人、日系人の集まり）をリスト化することで存在を明らかにする。現状では全国を網羅するリストは存在せず、全国規模での団体同士の連携もない。

[illegible]

“日系”の名のもとに文化的、政治的に地域住民と協力体制を築いている現場を検証することにより、日系のブラジル社会への浸透度、貢献度を明らかにする。地域での日系の存在感や存在価値を見直し、ブラジルにおける日系像の認識が現実 に即したものに改めることで、実態に合ったかたちで改めて日系社会をアピールすることができる。

日本文化や和食、スポーツ等の発信地たる（多くは地域唯一の）文化施設としての活動・役割を明らかにする。今後、日系団体の教育のノウハウやスポーツ振興が、教育の立ち遅れたブラジル社会が必要とするものとして、協力できることを考えるきっかけとなることを期待する。

ブラジルの影響を受けた日系社会の変容の実態から、ブラジル化しながらも日本性を保つ日系の民族性を探りだす。日系人が維持しようとする日本人性を見出すことで、日本人の本質や特質に迫ることができると思われる。また、被調査地域の「日系人」の範囲とその推定数、進行中の混血の実態や、変化する「日系」の概念を探ることで、今日のブラジル社会における「日系」の定義やアイデンティティを検討する。

2. 調査方法

会長はじめ役員、会の歴史を知る人、婦人会など現地会館に3～4人集まってもらい、調査票に従ってインタビューを行う。主な内容は以下の通り。

- ①インタビューを受けた人のプロフィール
- ②団体基本データ（正式名称、所在地、歴史等）
- ③団体の構成（会員情報、施設等）
- ④団体の活動（目的、役割、収入、イベント、日本語学校、婦人会等）
- ⑤日系人の特徴
- ⑥周辺情報（デカセギ、地域の産業、近隣の日系団体情報等）

・全12ページ、142項目。

（インタビューのようす／左・リベイロン・プレット、右・アサイー）



3. 調査結果中間報告（2016年4月～2017年3月）／調査結果と考察

3.1 日系団体（調査地）の割り出し

現段階での団体存在数は、以下のとおり。現地での聞き込みから予想以上に増加した。ただし、一部実際に現在も存在しているのか不明、あるいは活動を続けているか不明なもの、「地域連合」として会館を持たず、それ自身は活動は行わないものなど、調査対象にならないものも含んでいる（5～10%程度と予想）。

表1 地域別日系団体数（2017年3月現在の推定）と調査済み団体数

地域区分	団体数	調査済み団体数
サンパウロ州	258 (うちサンパウロ市内 52)	109
パラナ州	77	5

南部 SC、RG 州	30	
リオ、ミナス、ES 州	28	1
北部 PA、AM 州	23	4
その他 北部、北東部、中西部	61	
合 計	477	119

3.1 現段階において

今の段階ではコンピューター処理をしていないので、統計的に正確な数値を出すことはできないが、概要として次のようなことがわかった。

3.1.1 インタビューに答えてくれた人（会長、副会長など役員、事務局、顧問、相談役など）に関して

- ・ 会長はじめ役員は、二世が多く（約 80%）三世はまだ少ない。一世はほぼいない。
- ・ 30 代、40 代は少なく、50 代～70 代が中心。
- ・ なり手がないため、役員を同じ顔触れで順繰りに歴任することが多い。
- ・ 会長を他地域から来た新人（その地域出身でない人）に押し付けることがあり、実は地元や会の歴史についてあまり知らない。
- ・ 若い世代がグループをいくつか作っておき、持ち回り制で役員を務めるところ（ドラセナ、カスタニャール、アリアンサ（ジェツリーナ市）などで行っている）は、役員人事の人材に困らない。
- ・ 若い世代が役員を担うと機動力があり、社会とのコミュニケーションにもたけているため、新しい事業などに着手し新しい方向に切り開く例がある。

3.1.2 日系団体としての存在の特徴

- ①基本的に地域（土地）を基盤にした日系人の集まり
 - ②日本人日系人の親睦
 - ③日本文化（生活や倫理上の習慣）や日本語の維持継承。
 - ④その延長上にあるスポーツの推進。
 - ⑤会長はじめ役員がボランティアであり、基本方針として非営利組織。
 - ⑥会員制クラブ形式に近い場合でも、日系性を概念の根底にし、ボランティアが必須。
 - ⑦登録が正式でない非公式の会館も含む。
- ・ 本来は前述の目的だったが、会員減少や高齢化で存在意義がやや変化してしまったものとして会館の存続意義や運営方針を変える団体がある。
 - ①政治などを含む社交の場として存続。日系同士のつながりを大切にしながら、

日本文化はあまり意識していない。

②実質が老人クラブ（昼間集まってトランプ、カラオケで過ごす寄合になっている）。

③元住人たちの親睦の場。

・ 地方では、市で唯一の文化施設として機能していることもある。

・ 街の中では非日系ブラジル人が「Kaikan」と呼んでその存在を知っている。



“Kaikan”と書かれた道路標識（左・カッポン・ボニート、右・ジェツリーナ市アリアンサ地区）

3.1.2 会員について

- ・ 「家族会員」システムがほぼ 100%。
- ・ 家族会員＝1 家族あたり平均 3 人。
 - ✧ バストスの資料（2014 年会員名簿より）： 家族数 1034 人数 3157 人（平均 3.053 人）
 - ✧ パラプアンの資料（2017 年度会員名簿）： 家族数 53 人数 149 人
 - ✧ ジャンジーラ（口頭）： 家族数 30 人数 90 人
- ・ 会員数は、最小で 10 家族、最大級で 500 家族。
- ・ 会員数 100 家族前後が多く、その規模の会館であれば比較的活動が活発。
- ・ 1970～80 年代に会員が最も多かった所が多い。
- ・ 会員数は減少傾向が 60%、横ばいが 30%、増加が 10%。必ずしも減少ばかりではない。

3.1.3 役員、会員における非日系の存在について

- ・ 役員も会員も非日系の参加はきわめて少ない。
- ・ 参加の条件は、日系と婚姻関係にある非日系とするところがほぼ 100%で、その他単独での非日系参加はきわめて稀。青年会にはまれに非日系の単独参加があり会長もいる。

3.1.4 活動拠点としての会館、施設について

【研究・調査報告】

- ・ 土地と建物は 95%が会の所有物で、多くが体育館並みの立派な建物やスポーツ施設を所有している。
- ・ 市から文化施設として認められているため、不動産税が免除されているところが 80%。
- ・ 立派な建物を持つ団体は、社会活動や公共の場として利用されたり、結婚式場として利用されたりし、賃貸費が収入源になる場合がある。
- ・ 売却、閉鎖したところもあるが、新たな会館建設や増築を行い、将来への投資を続けるところもある。



(左上・カンピーナス、右上・レジストロ、左下・オズワルド・クルース、右下・オザスコ)

3.1.5 会費と運営費用について

- ・ 会費は、無料～2000 レアルまでまちまち。
- ・ 運営資金はイベントによる収入にたよる場合が 80%。日本祭りのなものや盆踊り、農産品祭り、ビンゴ等) でヤキソバ、うどん、天ぷらなどを販売しまかなう。
- ・ 日本語学校の運営はイベント収益に頼ることが多い。それらを支えているのは婦人部で、婦人部の活動が活発なところは資金が豊富で、イベントや日々の活動も規模が大きい。

3.1.6 年間行事と活動について

- ・ 年間行事として主に行われているのは、
- ・ 新年会（拝賀式と呼ぶところも 5%くらいあり）、運動会、母の日、父の日、敬老会、
- ・ 盆踊り、ビンゴ、カラオケ大会、スキヤキ、ヤキソバ、忘年会など。
- ・ 活動としては、伝統的に野球、陸上、ゲートボール、卓球などが盛んだが、全体的に消滅傾向。
- ・ かつては、柔道、相撲、剣道などもあったが、壊滅状態に近い。
- ・ 野球、柔道、卓球、水泳などは、日系によってブラジルに普及した。
- ・ 近年、和太鼓が人気で、和太鼓のある会館には子どもや若者が多数集まっている。
- ・ 子どもが参加するスポーツは、食事の用意、大会準備など、ボランティアとしての親の協力が絶対に必要なだが、ブラジル人の親が理解しないため、非日系の子どもの参加が難しい。



（運動会、敬老会、盆踊り）

3.1.7 イベント開催について

- ・ 各地で行われる「日本祭り／ジャパンフェスト／エキスポジャパン等」や「桜祭り」

「柿祭り」「ショウガ祭り」「イチゴ祭り」「寿司祭り」等は、ほとんどが文化協会系の団体による運営。

- ・ 大きなイベントは、市の公式行事となっていることが多い。
- ・ 動員数 1000 人から 2 万人規模。
- ・ 参加するのは 70～80%が非日系ブラジル人。
- ・ 盆踊りなどはすでに共有感があり、ブラジル社会と一緒に楽しんでいる。
- ・ 来場者が楽しみにしているのは主に日本食で、ヤキソバを筆頭にテンプラ、うどん、巻きずし、弁当などが人気。多いところで 1 日 2000 食を売る。
- ・ 会員たちがほとんどをボランティアで運営する。
- ・ 若者たちがボランティア活動を通じて日本的習慣（共同作業、後片付け、チームワークなど）を身につける場となっている。



(スキヤキ)



(ソロカバの日本祭り)



(ブラジル人に大人気のヤキソバ)



(ブラジル人社会に浸透する日本食)

3.1.8 日本語学校について

- ・ 子どもたちの教育のために「日本語学校」（日常通うブラジル学校に対して「日本学

校」という場合が多い)を用意し、それが会館づくりのきっかけになった場合が多い。

- ・ 生徒が少なくなり（子どもがいない、興味を持たない、先生がいない等の理由）、閉鎖したところが70%。
- ・ 日本的習慣、日本人魂までを教えたいという日本語教育への思い入れが強いと難易度が高くなるため、ただの語学学校化することで生徒を増やす方策をとるところも出てきた。
- ・ 教師の給料が安いためになり手が少ない。



(ベレンの日本語学校文化祭)

3.1.9 日本語と日本人性について

- ・ 日本語は話せる人や理解できるレベルの人もあるが、ほぼ使わない。
- ・ 日々の活動ではポルトガル語の使用が普通だが、日本性は大切にしている。
- ・ 協調性、助け合い、礼儀、目上を敬う、他人への思いやり、後片付け、物を大切に扱う、時間を守る、先祖を大事にするなど。この場合の先祖はブラジルへ移民した祖父母や曾祖父母を意味するのが通常。

3.1.10 存続危機状態の団体について

- ・ 会館や施設はきれいに残っているが、利用する人間が少なくしかも高齢化し、消滅しそうな団体も10%程度ある。
- ・ 一方、一度つぶれかけた、ほとんど放置状態だった（イラプルー、オズワルド・クルース、パラプアン）、会員で遺産分割するところだった（ジャグアレー）などの状態から、その後の会長が継続する意思で、会館の補修、活動の復活などを行い、盛り返しているところもある。

4. 最後に

「日系社会」というものについて

通常「日系社会」の訳語を「Colônia japonesa」、「Comunidade japonesa」などとするが、ブラジル社会におけるポルトガル語としては、イメージがしにくいようで、多くのブラジル人に質問をするなかで、それぞれイメージするものが違うという印象を受ける。ブラジル人にとっては、言葉の意味自体がわかっていない場合もある。

「コロニア・ジャポネーザ」はもともと移民当初の意味としては「日本人集団地（として開拓された土地）」だが、日本人の間では時間とともに、移住地、集団地から発展した精神的つながりや地域的つながり（現状、必ずしも集団地ではなく都市に散在する）となり、そのつながりをもって集まる場所、すなわち会館そのものを「コロニア」と同一視している場合が多くなったようだ（サンパウロのような大都市にはあてはまらない）。

日系人は、移住後、よりよい環境を求めてさらに国内移住をすることが多く、一生の中でいくつかの「コロニア」に属することがよくある。また結婚や仕事による移動もあり、姻戚関係や人脈がブラジル全国に広がりつながっている。目には見えないこのネットワークによって本調査もずいぶん助けられている。広い意味では、この同じ日本人精神でつながったものが「日系社会」なのだと思うが、ブラジル人の具体的イメージとしては日本人（日系人）の集団が「コロニア・ジャポネーザ」であり、その具体的な姿が「Kaikan」なのだと思う。そういう意味でいえば、ブラジルには日系社会が 450 以上存在していることになる。移民社会ブラジルでも、他にそれだけの遺産を持つ民族はいない。おそらく世界でも貴重な存在といえるだろう。

活動 2 年目となる 2017 年度は、今までの移住地とは違う経緯で日本人・日系人が移住した地域の調査に突入する。新たな局面からより深い考察のできる調査結果が出ることを期待している。



（日系社会が存在する町には多く日本人移民を称えるモニュメントがある。多くは移民 100 周年時に作られた。左上・ボツウポランガの公園にある鳥居、右上・マイリンケの日本人移民 100 周年記

念、左下・ドゥアルチーナの 100 周年記念、右下・アサイーに建設された城)

